

nikkor club

267
2021 WINTER

ネイチャーフォトの
楽しみ方

特集



CONTENTS

特集1

04 ネイチャーフォトとは何か

三好和義／高砂淳二／二神慎之介／星野佑佳

特集2

12 D.D.ダンカンの素顔

佐藤倫子／吉井篤志(吉井画廊)

コンテスト

- 32 サロン・ド・ニッコール カラーの部
選評：ハナブサ・リュウ／佐藤倫子
- 44 サロン・ド・ニッコール モノクロームの部
選評：大西みつぐ
- 52 ネイチャー・フォトサロン
選評：小林紀晴
- 60 チャレンジ・フォトサロン
選評：三好和義
- 66 総評・得点表
- 68 ワンポイントアドバイス

連載

- 表2 北の大地から
冬、野生の息吹 半田菜摘
- 20 受賞者の“いま”
第69回ニッコールフォトコンテスト長岡賞受賞
川原玲音 文：池谷修一
- 24 私のライフワーク 第3回
微笑み ハナブサ・リュウ
- 26 エプソン 楽しくきれいにプリント 講座 vol.10
Epson Print Layoutで作品づくり
- 28 アベっちのZの秘密 その10
Z単焦点レンズとしての魅力が満載
NIKKOR Z 28mm f/2.8 (Special Edition)
阿部秀之
- 31 Let's Go Nikon College! 第10回
組写真のオンライン講座のご紹介 秋山華子



表紙写真 二神慎之介

東北の山間で見かけた、幼いカモシカ。
まだあどけなさが残る表情だ。深い雪
と空腹のせいだろうか、あまり活発に
動き回る気配がなかった。相手の反応
を見ながら、瞳をのぞき込むようにし
て静かにシャッターを切った。
D5・AF-S NIKKOR 500mm f/4E FL
ED VR+AI AF-S TELECONVERTER
TC-14E II・WB晴天

作品

- 02 THE GALLERYセクション展
『羅臼』－漁師の海、ヒグマの山－ 二神慎之介

- 表4 小林紀晴×Z 7II

製品情報

- 18 Z9が生み出す新時代の撮影表現 山口規子
- 22 PRODUCT REVIEW VOL.17
Z9 上田晃司
- 30 おすすめアクセサリを探せ! 特別編
ニコンクラブ会員様向け
特別販売のご案内

インフォメーション

- 69 PHOTOGALLERY INFORMATION
- 70 会員写真展 PickUP!
10人の生徒で始まった 吉田 功
一期一会 小池喜美枝
- 72 NCニュース
- 75 イベント年間スケジュール／支部だより
- 76 イベント情報
- 表3 楽しく学べる! 写真教室 Nikon College
- 巻末 ニコンダイレクトFAXご注文票
ニッコールクラブ登録情報変更依頼書
会報268号フォトコンテスト応募規定

特集 — 出会いの感動を写真で表現する

ネイチャーフォトの楽しみ方

日常の生活を抜け出し自然の中に身を置くと、「きれい！」と出会いに感動したり、

「すごい！」と現象に驚いたり心が大きく揺さぶられ、シャッターを押してその瞬間をとどめたいくなる。

そんな写真は見る人にも喜びを与えるはずだ。

今回は4人の写真家に登場いただき、ネイチャーフォトの魅力を語ってもらう。

感じた何かをストレートに伝えたい

そこにはきつと感動が写っているはずだ



大潮で満潮のときでないとここまでたどり着けない。撮影時間はわずか15分ほど。そうしないと舟で戻れなくなるからだ。また実際には暗く鬱蒼としていたが、明るく設定することで頭に描いていたイメージでとらえることができた。そうやって撮ることで自然と一体になれるのだ。

D810・AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8E ED VR・絞り優先オート (f/11・1秒)・ISO100／石垣島

(みよし かずよし)

1958年、徳島生まれ。14歳の時単身で沖縄先島へ撮影旅に行く。以来、沖縄に通い17歳の時ニコンサロンで最年少の個展開催。27歳の時初めて出版した『RAKUEN』で木村伊兵衛写真賞を受賞。ユネスコの依頼を受け日本の世界遺産を撮影。その作品は国際交流基金の手で世界を巡回した。最新刊は大型本『東大寺』。

ネ

イチャャーフォトという言葉は、写真家によって定義が違って、コンテストなどの場では応募者

の方が戸惑うこともあると思う。私は、手を加えない自然な写真であるべきと思っていて、現場で自然と向き合ったときに感じたものを写真で伝えることが写真家の役割だと考える。そこには「神秘的」だとか「雄大」とかいった「感じた何か」が必ずあるわけで、その気持ちをどう写真に写し込めるかが重要。簡単に言えば、気持ちよくてスケールのある写真を目指している。

ニッコールは、顕微鏡写真や水中写真といった科学写真のなところから移ってきている歴史がある。さらにはドキュメント的な要素も強くあるので、表現の幅は実に広い。どうしてもきれいでストレートなネイチャーフォトは「強い」「弱い」という視点で比較されると、既視感があったり、劇的なシーンでないと負けてしまうことがある。だからこそ、きれいで終わらないテーマが内包できると深い表現が可能となり、強さと対峙し



Photographer ①

三好和義

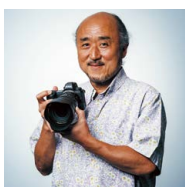
KAZUYOSHI MIYOSHI

て競えるようになるだろう。そこには撮った人の「手応え」が見えてくるはずなので、簡単にあきらめないでほしい。

ネイチャーフォトの一番の魅力といえば、自然と一体になれることだ。むしろこれがすべてと言ってもいい。だから私は現場で肌に伝わってくる感覚を大事にしている。ミラーレスカメラを使うようになって、ファインダー内で仕上がりを見ながら細部までこだわられるようになった。もちろんパソコンの前で現場の様子を思い出してレタッチするのも悪くない。だが、現場で光を感じながら明るさや色合いなどを追い込むからこそ一体感のある写真になるはずである。また自然と一体になるには、環境を理解したり、気象を学んだり、歴史を知ることでも大切なポイントになる。偶然の出会いも感動を呼ぶが、すべて読みながらその瞬間に立ち会えるのもまた写真を撮る喜びになる。

表現を深めていこうとすると精神性といった言葉がキーワードになってくるが、写真を撮ることを難しくすることにも繋がる。すべての人がそれを追求する必要はないように思う。だからいかに楽しんでいるかが重要ではないだろうか。私もコンテストの審査の際に応募作品を見て、「ここへ行ってみたい」「こんな写真を撮ってみたい」と感じる人が多い。そんな気持ちの高まりが写真にプラスアルファを与え、多くの人に伝わるネイチャーフォトが撮れるだろう。

自然にフォーカスして その機微を感じ取るのが 魅力である



Photographer ②

高砂 淳二

JUNJI TAKASAGO

白

然写真に限らず写真を撮るときは、心が動かされ、それを写真に残したい、写真で表現したい、

という気持ちの動きが始まりになる。自然写真であれば、「この花、かわいいわ」「この木には、凄い生命力を感じる」「この海のブルー、とても気持ちいい！」「この虫の羽根の模様が不思議だ」など、それぞれの人が感じる何かを写真に写し撮るのが大切だ。そんな、写真を撮るための一番おおもとなる気持ちの動きがあつてはじめて、写真に撮影者の気持ちが乗り、それが見る人にも伝わることになる。

ではどうすれば心を動かされるか。まず、しっかり目の前の自然を感じようとすること。そのことで自然への共感力が増し、少しずつ、風の動きや、木漏れ日の美しさ、森の香り、植物から発せられるエネルギーなどが感じられるようになってくる。体調を崩した我が子の具合を真剣に感じ取ろうとするのと同じように、自然にフォーカスしてその機微を感じ取るのだ。

感じようとする気持ちは、相手が動物の時にももちろん大事だ。「かわいい！」というこちらの一方的な気持ちだけでなく、こつちを怖がっているのか、興味を抱いているのか、どこから見ると一番その動物らしさが表れるのかなど、よく動きや表情を観察し、同時に気持ちを察することですぐに寄り添った撮影のしかたが見えてきて、一番いい表情や仕草を捉

えることが可能になる。

僕らプロを含め、自然写真を撮る人の多くは、目の前にある自然がいかに素晴らしいかを伝えたくて写真を撮っているはずだ。しかしその目的が知らず知らずに、自己顕示欲の方に取って替わられてしまうと、被写体への温かな眼差しは覆い隠されてしまう。あくまでも被写体となる自然を尊重し、それが変化してしまわないよう、そつとすくつてあげるように撮るのがいい。

そのうち、家においても、いつも見ている花の繊細な構造や、雲の形の変化、窓ガラスを這う虫の必死さなどにも心が動かされ、その奥にある生命の不思議さや、この宇宙全体のはたらきなどにも、心がときめいてくるだろう。カメラという機械を通して、この世界が、本当はそんなワクワクするワンダーランドだということが見えてくるから面白い。

(たかさご じゅんじ)

写真家。1962年宮城県石巻市生まれ。海中から生き物、虹、風景、星空まで、地球全体をフィールドに撮影活動を続けている。「Planet of Water」、「night rainbow」、「Dear Earth」光と虹と神話」ほか著書多数。テレビやラジオ、雑誌、トークイベント等で、地球のこと、自然と人との関わり合いなどを幅広く伝え続けている。海の世界NPO"OWS"理事。



(上) 謎に包まれた、イースター島のモアイ像。なぜ作ったか、どうやって運んだか、また、先住民族はどうして島からいなくなってしまったか……。夜のモアイは、まるで宇宙に想いを馳せているように見えた。 D800E・AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED・f/2.8・6秒・ISO3200・WBマニュアル

(下) 雨の中、ハチドリが佇んでいた。ハチドリにとって雨粒は決して小さくはないだろうが、それでも雨を“恵みの雨”として捉えようと、前向きに雨に打たれているかのように見えた。 D850・AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR・絞り優先オート (f/8・1/200秒・-0.7補正)・ISO400・WB太陽光



効率に背を向けて
理想の出会いを求めろ
そのプロセスが
物語のある一枚を生む



Photographer 3

二神慎之介

SHINNOSUKE
FUTAGAMI

野

生動物を被写体とした撮影への
取り組み方には様々なスタイル
があると思うが、私は撮影効率
よりも、どのようにして出会うか、どんな
シーンを見たいか、ということに重視す
る。例えば山で会うクマと、川で出会う
クマでは、取り巻く環境が全く違う。同
様に、雪の舞う森の中で、必死に木の枝
の皮をかじっているシカの姿と、初夏を
迎える頃の淡い緑の中、子鹿を連れて歩
く姿では、見る者に伝わってくるものが
異なるだろう。

しかし相手は野生動物。こちらが思い
描くようなシーンの中に、都合よく彼等
がいてくれることは非常に稀だ。ゆえに
撮影者は理想の出会いを求めて、長い時
間をかけてフィールドをさま迷うことにな
る。

反対に撮影効率を重視するならば、な
るべく「必ず動物がいる場所」を求めるこ
とになるだろう。自らの足でその場所や
条件を探す時間が取れないならば、自ず
と「有名」や「定番」という冠が付くスポッ
トに通うことになっていく。そういった
場所で、誰よりも美しく、素晴らしい一
枚を撮る、という醍醐味もあるだろう。
しかし私の場合、理想の被写体に会えな
いままに過ごすフィールドでの長い時間
に、撮影活動についての醍醐味を感じて
いる。発見した動物の痕跡や、本や人か
ら教わった知識、それから何度も撮影に
通うことによって積み重なってきた経験

値と勘……。それらのどれが欠けても、
撮影は前に進まない。発見や驚きを繰り
返しながら、少しずつ理想の出会いに近
づいていくのだ。

それはやみくもに奥地に入っていく、
という意味ではない。例えば人の生活圏
のすぐそばにやってくる動物たちも注意
深く観察することで、同様の発見がある
ものだ。

長い時間を越えて理想のシーンに巡り
合えた時、もしくは想像を超える意外な
出会いを驚きと共に迎えた時、その瞬間
は撮影者自らにとってかけがえのない「自
分だけの動物との出会い方」になってい
る。そしてそこに至るまでの過程は、写
真を裏付ける「物語」となって撮影者の
心の中に残る。一頭一頭との出会い方、
一枚一枚の写真を裏付ける物語は、時に
写真そのものを越えた経験の財産として
残っていく。

私はそんな思い出を反芻するとき、自
然写真を撮る者としての深い幸せを感じ
る。

(ふたがみ しのすけ)

写真家。会社員として広告記
事等のライター・ディレク
ターの経験を積んだ後、独立。
ヒグマや漁師など、北海道の
野生動物や自然に関わって
生きる人々を題材に撮影活
動を続ける。現在は東京在
住。本州の動物撮影にも取
り組んでいる。写真絵本『ヒ
グマの旅』(文一総合出版)。



(上) 人が暮らす集落のすぐそば。木々の新芽や花を食べに、ニホンザルの群れが訪れる。群れによって性格が違い、人間の接近を嫌がる群れと、そうではない群れがあるようだ。 D850・AF-S NIKKOR 500mm f/4G ED VR・絞り優先オート (f/5.6・1/1000 秒)・ISO640
(下) ツキノワグマを探る中で、新芽が出る季節にカモシカがやってくる場所を発見。待ち伏せすると、想定外のすぐそばに出現。ブッシュの中だが、臨場感のある一枚となった。 D6・AF-S NIKKOR 500mm f/4G ED VR・絞り優先オート (f/4・1/640 秒・-0.3 補正)・ISO640



何度も感動させて
もらえる喜びが
写真を撮ることの
原動力になる



Photographer 4

星野佑佳

YUKA HOSHINO

個

展のため富山に滞在した時、訪れた雨晴海岸。朝一番に乗り込み、暗い時間からタイムラプス用のインターバル撮影を始めた。肉眼ではライトなしで歩けないほどの暗闇でも、レンズを通すと普段見ることが出来ないような幽玄な世界が映し出される。

これをなんとかモノにしなければと試行錯誤するうちに薄明が近づき、隣に一人、二人と撮影する人々が並びだす。やがて日の出時刻になり、ふと、振り返ると、いつの間にか背後にはものすごい数の老若男女がずらりと集まっていた。地元の「常連さん」らしき人達もいるが、スマホ片手の観光客や近所の人も多いようだ。

風景を撮り始めてから、20年以上が経つが、ふた昔前なら初日の出以外のこの時間帯は、写真を撮る人くらいしかいなかったのだが、今は自然風景の魅力が写真愛好家以外の人たちにも伝わっているのだろう。

魅力的な風景を「撮影」するのは、とても贅沢なことだと実感したきつかけがある。お気に入りの風景を、俳句を嗜む母にも見せてあげたいと出かけた時のこと。運のいい母は、見事に素晴らしい光景に出会ったが、5分もすると車に戻ってしまった。せっかく遠路はるばるきたのだから、「もっとと見てよ」「もうちょっと味わってよ」と食い下がる私に、「俳句には、これで充分なの」と返し、車内で手帳と

にらめっこで俳句を練る母。

私はというと、立ち位置を変えたり、構図を変えたり、レンズ交換や、フィルターを付けたり外したりと、時間はいくらあっても足りないほどなのに。

その時、私は悟った。

目の前の魅力的な景色を、他の人の何倍も、何十倍も満喫し、しかも自分好みに写しとめた画像をお持ち帰りできるのが、どれほど贅沢なことかを。しつこい性格の私は、数日間、同じ場所で粘ることもある。真夜中の幻想的な光景や、朝日夕日を浴びた神々しい光景、青空に映える光景、雨に濡れてしっとりとした光景……。5分で帰る人が見逃しているいろんな顔に出会え、何度もなんども感動させてもらう。美しい風景を探し、訪れ、堪能して写しとめる。目で見るより魅力的に表現できた時は至福の喜びだ。

世の中には多くの趣味や仕事に溢れているが、こんなに楽しく贅沢なことに出会えた幸運に心から感謝している。

(ほしの ゆか)

京都市生まれ、在住の女性フォトエッセイスト。同志社大学法学部卒業。2000年の海外放浪の旅を機に、帰国後は日本全国を旅しながら撮影。2005年から地元京都の風景や歳時記の撮影も手がける。近著に『京の祭と行事365日』（淡交社）、『撮り旅』（風景写真出版）がある。



(上) 露出平滑化を「する」にしてインターバル撮影をした中の一枚。一枚一枚を作品として残せるだけでなく、Z 7 IIはカメラ内でタイムラプス動画を自動作成してくれるので、とても便利だ。 Z 7 II・NIKKOR Z 70-200mm f/2.8 VR S・絞り優先オート (f/11・1/25 秒・-0.7 補正)・ISO400
(下) 適度の雪を被った残り柿の赤い実と笹の葉の組み合わせに魅力を感じて撮影。まっすぐな竹のラインと曲がりくねった柿の枝とのバランスをとりながら構図を決めた。 Z 7・NIKKOR Z 70-200mm f/2.8 VR S・絞り優先オート (f/11・1/13 秒・-1.3 補正)・ISO64



楽しく学べる！
写真教室

Nikon College

ニコン カレッジ



ニッコールクラブ会員

¥1,000 割引

※割引対象外の講座もございます。
詳細はニコンカレッジWebサイトをご確認ください。

1月・2月・3月講座 **12月10日(金)** 申込受付開始

詳しくはニコンカレッジWebサイトをご覧ください。(12月6日(月) 更新予定)

<https://www.nikon-image.com/nikoncollege/>

ニコンカレッジ

検索



ニコンカレッジは、全国の第一線で活躍中の50名を超えるプロ写真家が講師を務め、どなたでも受講いただける写真教室です。初心者から上級者まで、お客様の興味や目的に合わせて、多彩な講座ラインナップからお選びいただけます。少人数でプロから直接学ぶ撮影ノウハウは、きっと、あなたの写真表現の幅を広げることでしょう。ご自宅から受講できるオンライン講座に加え、全国7地区(※)で対面講座を開催。平日の仕事帰りや休日に学べる講座もご用意しています。ニッコールクラブ会員の方は割引価格で受講できる講座があります。対面講座は、新型コロナウイルス感染防止のため、定員を10名以下に抑え、検温、消毒、換気など各種感染防止対策を施して開講いたします。

※東京、大阪、名古屋、札幌、仙台、広島、福岡で実施

1月・2月・3月講座より、ピックアップ!

1 オンライン講座をさらに強化 ～「初めてのジャンルへの挑戦」をサポート

引き続き人気のオンライン講座に、「初めてのジャンルへの挑戦」をサポートする講座を新設し、充実させました。組写真・星景タイムラプス・比較明合成・ポートレートライティング・リビングフォト等々、「興味があったけど、きっかけが無かった」というジャンルが盛りだくさん。気軽に参加できる“セミナー形式”の講座だけでなく、受講者の作品を講師が講評しながらアドバイスする“講評会形式”の講座もありますので、対面講座への参加が難しい方もぜひご参加ください。

2 撮影実習とオンライン講評会を組み合わせた “ハイブリッド講座”を全国に拡充

お客様からのご要望が多い「対面での撮影実習とオンラインでの講評会を組み合わせた講座」を全国に拡充しました。「リアルな場(対面)での撮影実習で実践的に学びたいが、講評会は自宅のPCで作品を大きく観ることのできるオンラインの方が便利」という声にお応えし、この“ハイブリッド講座”を東京校だけでなく、札幌校・仙台校・名古屋校・大阪校・広島校・福岡校でも開講します。

小林紀晴 × Z 7II



Z 7II・NIKKOR Z 50mm f/1.8 S・f/1.8・1/800秒・-1.3補正・ISO800

遠くへ出かける機会が減り、
以前より家に居ることが断然多くなった。
「おはよう、ソラ」
最近、一日は
この一言から始まる。
そっと私の肩に
老鳥はきたる。